

命をつなぐ

塚 越 一 彦

奨励者紹介[つかごし・かずひこ]

同志社大学副学長

同志社大学研究開発推進機構長

同志社大学理工学部教授

「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。」

(マタイによる福音書 7章 13—14 節)

ご紹介いただきました塚越です。よろしくお願いいたします。所属は理工学部になります。理工学部には10学科ありますが、その中の一つ「化学システム創成工学科」になります。これまで、チャペル・アワーまたは「逝去者追悼礼拝」で、何度かお話をさせていただく機会をいただいています。いささか話が重なるところがあるかと思いますが、ご容赦いただきたくお願いいたします。

2005年4月のこと

春、4月のこの時季でのチャペル・アワーということで、今日は、「逝去者追悼礼拝」になります。

まずは、ご存知のことかと思いますが、「逝去者追悼礼拝」が、この4月に執り行われることになりました。たところから話を始めさせていただきます。痛ましい事故は、今から18年前に起こりました。

JR福知山線で脱線事故が、2005年4月25日午前9時過ぎに起こりました。月曜日でした。私は2講時の講義に向かう途中で、他の先生から、「大きな事故があったらしいです」と聞きました。それが私への第一報でした。この事故では、107名の方が亡くなられ、その中には、本学の女子学生3名が含まれていました。

学生たちは、2講時の講義に出席する予定で電車に乗って、京田辺キャンパスに向かっていました。「同志社前駅」で降りて、新緑のなか、坂道をのぼり、大学の正門を通過して、講義を受けるつもりでおられました。ごく普通の日が待っていたはずでした。

その普通の日が、一瞬の事故で消え去ってしまいました。事もあろうに、人生そのものまでもが、全て失われてしまいました。彼女らは、いつもの電車に乗って、この同志社大学京田辺キャンパスを目指していたのです。それがかなわなかった、その「思い」を推すると、18年たった今もいたたまれない気持ちになります。

また、JR福知山線の脱線事故から数日後の4月28日、福島県の磐越自動車道でバスが横転する事故が起こりました。ここでも同志社大学の学生さんが1名亡くなっておられます。春の連休を直前にして、突然、降り掛かってきた事故でした。

2005年に起こった、この2つの事故の犠牲となった本学の学生さん4人を偲んで、毎年4月に追悼礼

拝が行われるようになりました。その礼拝には、御遺族、友人を含めて多くの方々が出席され、故人を思い起こす大切な機会となりました。こうした経緯を踏まえつつ、2009年度からは、これまでの同志社大学の長い歴史において、志半ばにして在学中に亡くなられた学生さん、そして在職中に亡くなられた教職員の皆さんを含めて、ともに追悼する今日の「逝去者追悼礼拝」が執り行われることになりました。

今日、この日、お集まりいただいている皆様とともに、志半ばで亡くなった学生さんや教職員の皆さんの魂の平安を、心からお祈り申し上げたいと思います。そして、「逝去者追悼礼拝」の機となりましたこのような悲しい事故が起こらないよう、私たちは安全で安心な社会づくりに、皆で努めていかなければならないと思います。事故以外の病気等で、在学・在職中に亡くなられた方も多くいらっしゃいます。重ねて、深く哀悼の意を表します。

この礼拝を通して、誰しものが、命というものを改めて考える機会を頂いています。命について考えていくと、その終焉としての死は、避けて通ることはできない、誰しものが迎えることを再確認することになります。この「逝去者追悼礼拝」は、故人を偲び、魂の平安をお祈りする場であるとともに、今、ここにお集まりの皆さんが、それぞれの生と死について考える機会を、神様に与えて頂いている場でもある、と思っています。

命をつなぐ

私は、宗教家でも思想家でもありません。しかし、生と死については、古代の昔から人々が考え、多くの著書にも述べられていることを知っています。そして、生物学的な立場ではなく、人として生きていく中で、の生と死については、はっきりとした答えのようなものはないのでは、と思っています。実は、この生と死については、以前のチャペル・アワーでも述べさせていただきました。今日のメッセージの題目は、生と死にも関わるところで、「命をつなぐ」という視点でお話をさせていただきます。

「命をつなぐ」を、少し言葉が過ぎるかもしれませんが、地球規模の歴史的概念から、平たく言うと、ホモサピエンスという種をいかに長く地球上に存在させるか、と言うことになるかと思います。ホモサピエンスが地球上に誕生して、学説も色々あるようですが、約3百万年とされています。恐竜が地球上で生存していた期間が約1億6000万年とされています。恐竜の歴史に比べると、人類の歴史は、始まったばかりです。

一人一人の命に限りがあるように、人類の存続にも限りがあることと思います。恐竜が滅亡したのと同じように。しかし、人々は、「命をつなぐ」ことを考え続けます。

SFの世界では、もし地球上に住めなくなると、月とか火星とかに移住するという話も出て来ています。移住とまでは行かなくても、最近の目覚ましい科学の発展は、それらの惑星での短期間の生活を可能にする、と言われています。

太陽の寿命は、あと約50億年と計算できます。太陽が輝き続ける限り、太陽がエネルギーを供給してくれているあいだは、太陽系の惑星で、生命を継続していくことができるのかもしれませんが。太陽からのエネルギー供給が無くなれば、太陽系での生命の存続は難しくなるということでしょう。しかし、人は、命をつなぐこと、種を絶やさないと、考え続けます。

全くのSFの世界になりますが、かなり以前放映されたアメリカのテレビドラマの「スター・トレック」で

は、人間が宇宙船内で、長期間の生活を続けていました。詳しくは確認していませんが、太陽系から独立し、太陽からのエネルギーを基盤としない新しいエネルギー循環形態を宇宙船内で作り上げ、命をつないでいっていたのでしょう。SFの中の話ではありますが、どんな困難な状況の中でも、人は、意識する、しないは別にして、「命をつなぐ」、「種を存続させる」ことを、最終の生存目的にしているのではないのでしょうか。

人が命を繋いでいく行動は、DNAの塩基配列の中にすでに組み込まれているとさえ言われています。不慮の事故や病気で人が亡くなった時の悲しみは、命をつなぐ視点から、人々の根幹に危機感を呼び起こしているのかもしれませんが。そこからくる悲しみを乗り越え、ここにこうして皆で集まり祈りを捧げます。また、このような不慮の事故が起こらないように、最善を尽くしていくのだと思います。

同志社大学の研究

私は、研究開発推進機構長を務めています。同志社大学では、人文、社会、自然科学系のあらゆる研究が遂行されています。それぞれの研究は、どこかで「命をつなぐ」ことに関わっていると思います。ここでは、ごく簡単に「赤ちゃん学研究センター」と「カーボンリサイクル教育研究プラットフォーム」についてご紹介します。

「赤ちゃん学研究センター」は、板倉昭二先生が研究センター長でいらっしゃいます。文部科学省の共同利用・共同研究拠点に採択されています。採択期間は、1期6年で、昨年度から2期目に入っています。「はじまりは赤ちゃんから」がキャッチフレーズですが、「赤ちゃん学」の始まりは、同志社大学の「赤ちゃん学研究センター」からと言っても決して過言ではありません。世界的視野から見ても、独創的で先駆的な取り組みです。産婦人科と小児科があってもその間の赤ちゃんを対象にした学問領域は今までにはなかったわけです。「赤ちゃん学」には、魅力が溢れています。「赤ちゃん学」は、「命をつなぐ」という人類に与えられた課題に対して、様々な視点からヒントを与えてくれています。また、その情報は世界に発信されます。

「カーボンリサイクル教育研究プラットフォーム」は、理工学部の後藤琢也先生が研究代表者です。2020年10月には、当時の菅総理大臣が所信表明演説の中で、カーボンリサイクルの革新的なイノベーションの必要性を述べています。同志社大学「カーボンリサイクル教育研究プラットフォーム」は、その翌年の6月に立ち上がりました。

カーボンニュートラルとカーボンリサイクル、私はカーボンリサイクルが、カーボンニュートラルより、一つ高みの技術、概念だと個人的には思っています。同志社大学では、世界に先駆けて、この課題に取り組んでいます。CO₂を分解して、酸素と炭素を得て、それらをエネルギー源として利用します。そこで、再びCO₂が放出されれば、それをリサイクルして使っていく、ということなのです。

この研究が社会に役立つようになれば、CO₂とエネルギーに関わる捉え方が根本的に変化します。皆で知恵を出し合い、技術を提供しながら、新しい社会の扉を開こうとしています。とても重たい扉です。その手強さ、重さを今、実感しております。

でも、必ずや同志社の叡智が中心になって、皆様の力が集まり、この扉を広く開いていこうと思っています。扉の向こうには新しい社会が待っています。澄んだ空気とCO₂を豊富なエネルギー資源とする、夢

のような社会です。

研究事例として、「赤ちゃん学研究センター」と「カーボンリサイクル教育研究プラットフォーム」を上げさせていただきました。なぜ、同志社大学は、あるいは研究者は、このような研究に昼夜を問わず、向き合っているのでしょうか。

その理由は、突き詰めれば、個々が意識していようがまいが、どこかで「命をつなぐ」、「種をつなぐ」ことにつながっていると考えています。研究も教育も、全ての行動の原点には、「命をつなぐ」ことがあるのではないのでしょうか。それに反する事故や病気で命を落とすことがあれば、人々は大きな悲しみに包まれます。その教訓を生かし、悲しみを乗り越え、「命をつなぐ」ことへの反省や工夫をしていく。今日の追悼礼拝も、その一つに思えてきます。

大きな歴史的な幸せに

私達は、「命をつなぐ」ことの共通目的を持った仲間なのです。でも、一部で人々は、環境問題や戦争など、その目的を脅かす行動をしています。それは、種の存続より、個の利害を優先してしまうような大きな過ちから引き起こされているのでしょう。文明が発達するに従って、一つの誤りが、取り返しのつかない事態、種の滅亡に至る可能性もあります。「命をつなぐ」とは、どういうことなのか。一人一人の幸せをお互いが願い、大切にしていくこと、それが大きな歴史的な幸せに繋がっていくことではないのでしょうか。

最後になりますが、今日、皆さんとともに、祈る機会をいただいたことに心から感謝し、「命をつなぐ」ことの大切さを再認識し、私の奨励とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

2023年 4 月 25 日 京田辺火曜ランチタイム・チャペル・アワー「逝去者追悼礼拝奨励」記録